

もり こえ
森の声

加羅古呂庵 一泉

もり こゑ 森の声

駅を降りて、商店街を抜け、大規模なマンションが広がる先に、その森はあります。谷戸田の先に広がる里山ですが、その森は深く、起伏もあります。道はしだいに細くなり、すれ違う人もほとんどありません。若葉の季節に、この森を訪れました。そのときの印象をもとに、「木漏れ日の道」「若葉の香り」「金色の木々」の3つの部分で構成しました。

深い森に入っていく道は、木々の間から明るい陽射しが差し込んでいました。見上げれば、青空と新緑とが調和して、明るい気分にしてくれます。日が降り注ぐ平地から少しずつ登っていくにつれ、太い木々が迫り、だんだんと暗くなってきますが、森の中に日の光はきらきらと輝きます。

尾根道に至る手前に、小さな池がありました。昼下がり、あたりは鳥の声がときどき聞こえてくるほかは、雑然とした音もなく、時間が止まっているようにも思えました。水面には波紋一つなく、周りの木々の若葉に包み込まれてしまいそうです。

夕暮れが迫ると、日の光が森に横から入り込むようになります。垂直に聳え立った木の幹に夕方の光が当たると、木々は金色に輝きます。尾根から下る道の傾斜に促されて、光る柱が立ち並ぶ森の神殿の中を突き抜けていきます。再び平地に出て振り返ると、水が張られた谷戸田の先に、あの森が変わらず静けさをたたえていました。



森の声

加羅古呂庵 一泉 作曲
2021.5.23

♩ = 56
木漏れ日の道
in D

尺八I
尺八II

60

尺八I

尺八II

65

尺八I

尺八II

f

f

70

尺八I

尺八II

F $\text{♩} = 78$
若葉の香り

rit.

mp

rit.

mp

77

尺八I

尺八II

G

mf

mp

mf

mp

86

尺八I

尺八II

H

f

mf

f

mf

95

尺八I

尺八II

I

102

尺八I

尺八II

ff

mf

ff

mf

110

尺八I

尺八II

J

mp

mf

mp

mf

K

119

尺八I

尺八II

$\text{♩} = 144$
金色の木々

rit.

f

mf

rit.

f

mf

126

尺八I

尺八II

131

尺八I

尺八II

136

尺八I

尺八II

f

f

141

尺八I

尺八II

mf

mf

145

尺八I

尺八II

f

mf

f

mf

149

尺八I

尺八II

f

mf

M

154

尺八I

尺八II

mf

159

尺八I

尺八II

N

f

163

尺八I

尺八II

O

f

mf

168

尺八I

尺八II

f

mf

P

f

mf

173

尺八I

尺八II

178

尺八I

尺八II

183

尺八I

尺八II

Q

f

f

R

188

尺八I

尺八II

mf

mf

192

尺八I

尺八II

poco a poco rit.

poco a poco rit.

3 3 3 3